

## お殿様、狩へ行く

江戸時代の将軍や大名は、狩に出かけることがしばしばありました。例えば「鷹狩」はたいへん有名で、将軍で言えば、初代将軍・徳川家康や8代将軍徳川吉宗が好んでいた話はどこかで耳にされたことがあると思います。

萩や徳山の藩主も例外ではなく、国に帰ると狩に出かけていて、それに関する記録も多く残っています。それが、武芸鍛錬のためなのか、領内巡視のためなのか、それとも息抜き・娯楽のためなのか…？その目的をひとつに絞ることは難しいのですが、大名たちはたびたび城や館から外へ出て、狩を行っていたのです。

今回の展示では、大名が行っていた狩について、徳山藩第7代藩主毛利就馴（なりよし・たかよし）の事例を取り上げ、藩主が行う狩の様子を見てみます。時は安永9年（1780）～10年（1781）。場所は徳山、就馴は帰国中でした。

ちょっと近所で…

### ①御居間日記 安永9年6月9日条 徳山毛利家文庫「御居間日記」304

まずは日帰りで狩に出かけている具体例を見てみます。

資料は、徳山湾に浮かぶ仙島へ出かけた事例です。海を渡ることになりますが、徳山の館から著しく離れた場所とは言えません。近場で狩を実施していたようです。

安永9年から10年の在国中の約1年間では、江口開作や大島など、近場での狩は50回近い回数を数えます。

泊りがけでも出かけます

### ②須磨村御踏出御狩記 徳山毛利家文庫「御獵御行歩御供触記」14

この記録は、毛利就馴が安永9年（1780）11月4日から8日までの間、「須磨」（須万、現在の周南市）地域で狩を行った時の記録です。

およそ10日前の10月23日、須万での狩実施が公表され、お供のメンバーや勢子（狩の際、動物を追い立てる役）を差し出す村や人数が明らかとなります。

11月4日には徳山を出発、狩は5日と7日に行われました。5日は降雨により途中で取り止めとなってしまいましたが、7日は好天に恵まれ、8頭の鹿（うち2頭は就馴自身）と、2羽の兎を得ています。

そして8日、徳山に帰館しています。

獲物はみんなに

### ③御居間日記 安永9年11月9日条 徳山毛利家文庫「御居間日記」309

藩主の狩が実施され、多くの獲物が手に入ると、家臣などに分配されるケースがありました。この資料は②で行われた狩に続く記事で、就馴が徳山に帰館した翌日、自身が仕留めた鹿肉が分配されている様子が窺えます。この時は73名の人々に鹿肉が分けられました。

身軽ではありません

### ④御居間日記 安永9年8月26日条 徳山毛利家文庫「御居間日記」306

日帰りの狩であっても、決して軽装備で出かけたわけではありません。9月1日に大島山での狩が計画されたのですが、この時には珍しいことに、付き従う人々をあらわした「御備御行列」が付されています。先払いを先頭に、馬印や鎗、お召し用の馬など、参勤交代時の行列をコンパクトにした印象です。決して身軽に出かけていたわけではなかったことが窺えます。もっとも、殿様用の猟犬と思われる「御犬」が行列に加わり、狩らしい装いとなりました。

狩に備えて

### ⑤御居間日記 安永9年9月12日条 徳山毛利家文庫「御居間日記」307

藩主も人の子、せっかく狩を行うのであれば、確実に獲物を仕留めたいし、できれば大物や珍しいものを手にしたいという思いがあったようです。毛利就馴は、徳山の沿岸部の開作に、鶴が飛来した場合には直ちに連絡を入れる要員を配置しています。実際、10月27日に鶴飛来の報が入ると、現地に足を運んでいます。残念ながら到着時には鶴は飛び去った後でした。ちなみに、徳山藩には「獵方」という部署がありました。「獵方」の役人たちは藩主の狩に随行したり、事前に狩の予定地に派遣されたりしています。狩全般を取り仕切っていたわけです。

ギリギリまで…

### ⑥御居間日記 安永10年2月25日条 徳山毛利家文庫「御居間日記」312

安永10年2月28日、就馴は江戸へ向かいます。ところがその3日前の2月25日、彼は大島山へ狩に出向いているのです。23日にも狩に出かけているのですが、出立間際のこの行動はどういうことなのでしょう？彼の狩好きを示すものなのか、江戸での生活を前にした最後の気晴らしなのか…。いずれにせよ、これがこの在国中の最後の狩になりました。

展示期間

①～③ 7月1日(木)～7月15日(木)／④～⑥ 7月16日(金)～7月29日(木)